

2022年度

人権作品集

「人権」に関する標語選定作品 中学一年生

SNS
『便利』の裏には
SOS



人権に関するポスター選定作品

小学3年生



人権に関するポスター選定作品

中学3年生

「人権」に関する標語選定作品 小学五年生

勇氣出せ
だいじななかま
守るため

はじめに

名張市・名張市教育委員会・名張市人権啓発まちづくり事業推進会議では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや偏見・差別などの社会の不合理をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を、市民のみなさまから募集しています。

本年度も、小学生・中学生・高校生をはじめ市民のみなさまから、作文・標語・図画・ポスター・メッセージの作品を、合わせて一一、四八〇点応募いただきました。たいへん多くの方々、人権作品に取り組んでいただいていることに対し、感謝を申し上げます。

提出していただいた作品の中には、家庭や学校・社会生活で自ら体験したことや感じたこと、そして学習で学んだことを通して、人権尊重の大切さや、差別をなくしていくための意見、感想が述べられているものや、自分自身を振り返り、差別をなくしていくこうとする姿勢や意欲が伝わってくるものが数多く見られました。

この作品集は、応募いただいた作品の中から、作文十作品、標語十三作品、メッセージ五作品、図画・ポスター二十作品を選定し、掲載しています。本誌を、人権について考えるきっかけとするとともに、さまざまな学習の場でご活用いただければ幸いです。

なお、これらの作品の中から、図画・ポスターの二作品、標語の二作品を人権啓発用ティッシュに、そして、図画・ポスター八作品、標語五作品、メッセージ二〇二三年の人権カレンダーのデザインとして活用させていただきました。ありがとうございました。

目次

作文

【小学生の部】

○いとも、ぼくも、げんき100パー	一年生	4
○大切な心	二年生	5
○コロナについて	四年生	7
○大切なこと	四年生	8
○心のコップ	五年生	9
○当たり前前って何だろう	六年生	10
○ほんとうに繊細なもの	六年生	11
○本当の友だち	六年生	12

【中学生の部】

○私らしく生きる

一年生

14

○理解のしかた

三年生

16

標語

【小学生の部】

【中学生の部】

メッセージ「あなた大切な人へ」

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

図画・ポスター

【小学生の部】

【中学生の部】

・
・
・
24 21

・
・
・
20

・
・
・
19 18

作文【小学生の部】

いとも、ぼくも、げんき100パー

(小学一年生)

ぼくのいとは、うまれるまえからびょうきで、大きくなるかわからなかったって、ママからきいた。

ぼくは、(そうなんや) っておもった。だって、ぼくとおなじでげんきやし、ぼくとおなじで大きくなって。いとは、あたまが大きい。小さいときから、あたまをまもるためにヘルメットをかぶってるねん。

おもしろいおかげで、いっしょに一ねんせいになれた。うれしかった。

いとは、やすみじかにサッカーをしてあそんでるよ。いとは、

「三ねんせいになったら、サッカーをならう。」
っていった。うれしかった。

五ふんきゆうけいするとき、トイレにいったあと、ろうかから(ちゃんとやってるかな) って、いとこをみてる。せきがえしてたら、(あれ? どこ? どこ?) ってさがすねん。

いつかおなじクラスになってみたいな。

いとは、かえり、むかえにきてくれるけど、(いっしょにあるのかえりたいな) ってぼくはおもってる。いえにかえってから、たまにいとことあそんでるよ。

二人でゲームするのが、一ばんたのしいねん。

けんかするときもあるよ。いとは、かるくやけど、けつてくるときがあるねん。(やっべー) っておもうねん。

「いのちだけはゆるしてくださいー。」
て、ぼくがいつて、それでな、ぼくもいともわらうねん。

ぬいぐるみであそぶこともあるよ。いとは、リザー
ドンをもつてぼくは、ゲッコウガか、ルカリオをもつて、
いっしょにあそぶねん。

そしてな、たのしくて、ぼくはいともうえでねるねん。そしたらいとは、ぼくのかおのうえにのってねるねん。ときどき、ぼくのかおのうえに、いとこのあしが、ぼんつてのってねるときもあるよ。おもしろーて二人でわらうねん。

いとこといっしょにあそぶのが一ばんたのしいから、
いとはげんき100パーで、ほんとにうれしいわ。

きょうもな、いっばいな、いとことあそぶねん。

そしてな、あそんでときどきけんかして、たのしすぎたらいとこのうえでねて、ぼくもげんき100パーになるねん。

いっつもな、

いとも、ぼくも、げんき100パーやねん。

「大切な心」

(小学二年生)

たんじょう日に、おばあちゃんから「心のふしぎ」という本をプレゼントしてもらいました。

この本は、心がどこにあるかを考えるお話です。いろいろなどうぶつが出てきて、はな、頭、手などに心があると書いてありました。

その中で犬は、しっぽに心があると書いてありました。わたしも、人はちがうけれど、犬の心はしっぽにあるんだなと思いました。なぜなら、おばあちゃんの家でかっている「ぐーちゃん」と「れーちゃん」がうれしいときにしっぽをふるからです。こわいことやふあんなことがあるときは、しっぽを下げて足の間にかくしていることもあります。わたしは、犬の心はしっぽにあるけれど、人はどこにあるのかなと思いました。わたしは、この前五さいの妹とペンのとりあいをしました。わたしがつかっていたペンを妹が、なにも言わずにサツととりました。

「とらんといて。」

と、にげていく妹をおいかけました。

そのときわたしは、はらが立って妹をたたきたくなくなりました。でも、たたいたらママにおこられると思ったのでやめました。

そのかわりに、

「もうあそばないよ。」

と、言ってしまった。

妹は、

「なんで、なんで、なんで。」

と、なんでも言ったけれどわたしは、むしをしました。

おこったときは、たたきたくなるから手。

たたいたらダメと思ったときは、頭。

「あそばない。」と言ったときは口にあるんだなと思いました。だから人の心は、体のいろいろなところにあられるんだなと思いました。

妹とケンカをしたり、友だちといけんがちがってもめたりしたとき、おばあちゃんからプレゼントしてもらった「心のふしぎ」の本のことを思い出します。

うれしい気もちになったり、かなしい気もちになったり、おこった気もちになったりいろいろわかるからです。そして、なみだをながしてないたり、声に出してわらったりするのふしぎだなと思いました。

わたしは、心は大切なんだなと思いました。

心は見えないけれど、それぞれ心があるからけんかをしてもかなおりもできるんだなと思います。

これからは、みんながどんな心なのかを考えて行どうしていきたいです。おばあちゃんの家にいる「ぐーちゃん」「れーちゃん」もしっぱだけじゃなくて目や声とかも見てあげたいです。きつと心の声が聞こえると思います。

家ぞくや友だちの心を大切にして、わたしも自分の心を大切にしていきたいです。

コロナについて

(小学四年生)

私は、楽しみにしていた夏休み中にコロナにかかりました。おばあちゃんの家に出かけて帰ってきた後、家族の中で私だけ急に熱が上がってきて病院に行きました。一学期が始まってすぐに妹がコロナにかかっていたので、鼻に何かをさしてけんさするのは知っていました。妹が、「めっちゃいやだった。」と言っていたので、自分がけんさするときは、いたいかなど思ったけど平気でした。けんさの結果は陽せいでした。

家に帰ると、体が重くて、熱いし、頭、のどがいたくてほんとうにつらかったです。夜も一人でねないといけなかったで、こっそりねむれるまで、ユーチューブを見ました。ミニけいいたいにお父さんから電話がかかってきて少しお話もしました。家族のみんなにうつしてはいけないので、一人でねなくちゃいけないのは仕方ないなと思いました。先にコロナにかかってしまった妹のつらさもその時によくわかりました。

コロナにかかってからの十日間は、ずっと家にいなくちゃいけないし、家族ともはなれて一人で部屋にいたくちやいけなかったのでも不安でさみしかったです。それでもお父さんやお母さんがマスクをつけて顔を見に来てくれたり、食べ物を持ってきてくれたりしてお世話をしてくれました。とてもうれしかったです。十日間は長かったけど、元気になってよかったです。

二学期になってすぐに、担任の先生がコロナにかかって学校を休むということがありました。私は、「先生もかかっちゃったんだ。大じょう夫かな。早く元気になってほしいな。」と思いました。

先生は、お休みしている間、いろんなことを考えたそうです。心配なことたくさんあったけれど、いろんな先生から「みんなのことをしっかり見守るから、安心して休んで体をなおして下さい。」と言われたことはうれしかったし、ほっとしたと言っていました。

また、今はコロナという病気のことをいろいろわかってきて落ちていくときにかかった人は、ほんとうに不安で仕方なかったと思うとも言っていました。こわいのはコロナウイルスなのに周りのかかっていない人たちが、コロナにかかってしまった人をさけたり、いやなことを言ったりすることが、いろんな所であったとも話していました。さけられたり、いやなことを言われたりするのには病気に上につらいことだと思いました。ぜったいにあつてはいけないうことだと思いません。

コロナは、感せんよぼうしていてもかかってしまうことがあります。その人をせめるのはおかしいと思います。かかってしまった人にたいしては、「早く元気になってね。」という思いをもってやさしくせつしていかなければいけないと思うし、自分もそうしていきたいです。

大切なこと

(小学四年生)

わたしは、比奈知文化センターの見学と奥中さんの話を聞いて、差別やいじめをなくすことは大切だということが分かりました。

比奈知文化センターでは、「子もりぎつね」のやさしさや、人権カルタにこめられた思い、レインボーフラッグの色が表す意味などを学びました。

奥中さんの話では、だれもが持っている心のものさしは一人ひとりちがっていることが分かりました。自分をきじゅんにして、できるできないで人を見ることが、自分とちがうことでバカにしたりさげたりすること、それが差別やいじめにつながってしまうことも分かりました。

二つの学習で、人とのつながりを切ったり、人をこうげきしたりしたら、された人がどれだけつらいのか前より考えるようになりました。

わたしは今まで、あの子はあだからあまりしゃべらないでどうかとか、この子はこうだからさげようとかそういうことがよくありました。授業中感想を書く時に、自分の感想をチラチラ見ている子に対して、いやな気持ちになつてその子をさげていることもあります。今ふり返つてみると、もしその時どうして見てくるのか理由を聞いたり、だまつて見られるのはいやな気持ちになることを伝えたりできたら、その子の気持ちも分かり、自分の気持ちも分かつてもらえたと思います。そして、友だちが他の友だちにいやなことをされていた時に、奥中さんの話に出てきた六つの立場の中で、わたしは「見て見ぬふりをする子」でした。その時わ

たしは、「別にわたしには関係ないし、遊ぼ。」と思っていました。奥中さんの「見て見ぬふりをする子もいじめに関係ある子。」という言葉を聞いて、あの時ちゃんと注意して止めておけばよかったと思います。それにわたし自身も、友だちにしつこくいやなことをされた時に、周りの友だちが注意をしてくれてうれしかったので、そういう場面を見たときは、注意できるようにしたいです。

比奈知文化センター見学や奥中さんの話から自分のことをふり返つてみて、これからの考え方や行動を考えました。まず、あの子はあだから自分のものさしだけで決めつけずに、ちがう見方をしてみる、なぜそんなことをするのか理由を聞いてみることをしていきたいです。そして、いやがらせを受けている場面やいじめられている場面をみたときには、ゆう気を出して「何とかする子」になりたいです。でも、先生に「いじめられている子を助けて、次に自分がいじめられたら、助けたことをこうかいするか。」と聞かれたときに、「いじめられるのはつらいから、やっぱり助けなければよかった。」「正しいことをしたのに何で。」とこうかいすると思いました。そして、自分をいじめる子をゆるせないし、もし、助けた子が自分を助けずに知らんぷりをしていたら、助けた子もゆるせないと思いました。そんなことがくり返されるクラスなら、わたしはいたくありません。一人ひとりがみんなのことを考えて思いを出し合つて、助けたことをよかつたと思えるクラス、いじめのないクラスにしていきたいです。

心のコップ

(小学五年生)

人の心にはコップがあつて、いやなことがあつたりすると水が増えます。そして、その水があふれ出した時、人の心はこわれて学校に行けなくなったり自殺してしまつたりすると、弁護士の方に教えてもらいました。

ぼくの心のコップの水の量が増えるのは、だれかとけんかした時や友だちをいじめた時です。例えば、妹に

「お兄ちゃん、一緒にゲームしよ。」

と言われた時、ぼくは、

「今勉強してるからじやましやんといて。」

と言つてしまったので、けんかになつてしまいました。その時、二人の心のコップの水が増えたと思います。でも、

「今、勉強してるから、終わつたら一緒にやる。」

とぼくが言つていたら妹も、

「いいよ。終わるまで待つとく。」

と言つて、けんかにならなかつたと思います。

ぼくの心のコップが、あふれそうになつた時があります。それは、手術のために入院する日が一ヶ月後の七月一日と決まつた時です。その翌日に、術前検査がありました。いっぱい血を抜かれました。注射器二本分です。めっちゃ痛くて、泣きました。コップの水の量は、とつても増えました。それから入院するまで、毎晩泣きました。手術がこわかつたからです。コロナかで家族のつきそいができず、一人で手術、入院をしないとけなかつたので、とても不安でした。それで、もうがまんができないくらいコップの水が

たまりました。

入院する日も登校しました。しばらく友だちと会えなくなるので、最後にみんなの顔を見たかつたからです。早退する時、みんなが「がんばれ」「待ってるよ」「退院したら一緒に遊ぼな」「心配しなくても大丈夫だよ」とはげましてくれました。その時、あふれそうになつていたコップの水が少なくなつて、心が軽くなりました。入院中も手術をする前にズームで話しました。ロイノートで、みんなからはげましのメッセージも届きました。そのおかげで、手術をがんばることができました。

ぼくの心のコップの水は、こわくなつたりいやなことがあつたり、人にいじわるをするが増えます。反対に、はげまされたりほめられたりすると減ります。ぼくは今まで、自分がきずついた時に周りの人がはげましてくれただけで、コップの水があふれなかつたことに気がつきませんでした。同時に、友だちにいじわるをして相手のコップの水をあふれさせることをしていた自分にも気がつきませんでした。これからは、自分も友だちもコップの水が増えないように言葉や行動に気をつけていこうと思います。友だちの心のコップの水が増えているなと思つた時は、はげましたいと思いません。

当たり前前って何だろう

(小学六年生)

当たり前前って何だろう。それは、みんなと同じであること？いつも当然のようにあること？当たり前前について考えた。

学校に行くとき友だちがいる。一人では、わからない勉強も、協力してくれる人がいるからわかったり、休み時間には、遊んだりできる。また、日本にいる自分は、学校に通えること自体も、学校の存在の意味も考えることがない。他国では、戦争で銃声が聞こえ、何人もの命が奪われる状況の中、「学びたい」と強く望んでも、かなわないことがある。ところが私たちは、「行くのがめんどくさい。」「行っても意味がない。」などと、平和な状況で授業ができることに感謝もしないことがある。学校に通えて、先生や仲間が協力してくれるから、健康でいるから、自分が勉強できる。当たり前前かではない。文字が使えて会話ができる自分たちは、恵まれている。

その、学校に行けば当たり前前にいる仲間。でも、お互いの存在の大切さは、考えていない。私は、友だちがたくさんいる。もちろんけんかもある。周りの友だちにこわいなあと感じたり、どうしたらうまくいくのかなあと思ったりするときもある。相談ができ、安心して言いたいことをきちんと言えることができる本当の「仲間」になりたい。

わたしは、数年前、特別支援学級に通っている友だちのAさんに、間違った見方で接してしまったことがある。テストをする時、いつもちがう教室に行くことをずるいと思っていた。別室で先生に答えを教えてもらっているんじゃないかと思い、「むこうで教え

てもらってずるい」と言ってしまった。クラスの人たちも言っていた。その時Aさんは、「えっ」という困った顔で止まっていた。その私の一言でもとても傷ついていただろうと後で思った。それは、先生に、「問題がわかりやすいように先生と一緒に文章を読むことで、自分で考えて解けるんだよ。」と教えてもらったからだ。それは、ずるいことではなくて、その子がしっかり学べるために必要なことだったのだ。Aさんの当たり前前だった。私は、先生の話を聞いて、その時は何も言えなかった。そのころ、Aさんとクラスの子がもめることが多かった。私は、「そんな言い方をしたらAさんが困るやん。」ということができた。他の子たちも、「気にせんとときや。」とAさんに言っていた。そうすると、Aさんの顔が安心したような表情になった。Aさんに対してだけではない。決めつけることやきつい注意をすること、からかうこと、関わらないことなど、相手をはじめから受け止めようとしなないことがある。人によって「当たり前前」はちがう。友だちとの関わりが苦手な子、不安な気持ちを持つ子など、いろんなタイプの友だちを受け入れて、その子が安心できる環境をつくっていききたいと、最近よく考える。私も、そうすることで、友だちの笑顔が見られて嬉しい。

たくさんの安心できる仲間を作って、毎日学校へ通っている自分、たくさんの友だちと学べる自分。このことを奇跡だと思っ

て毎日大切に過ごしたい。

ほんとうに繊細なもの

(小学六年生)

人との関わりはとても大切で、繊細なものだと思います。自分の意見や発言を相手にわかってもらえると嬉しいです。また、それとは逆に意見や考えを完全に否定されたら、いやな気持ちになったり落ち込んだりします。時に人の感情は相手の言葉によって傷つき、お互いの関係も壊れてしまうことがあります。

一年ぐらい前の事です。ぼくには、とても仲の良い友だちがいました。その友だちは、僕にとっては大切な仲間でありライバルでした。その友だちとはいつも一緒にいました。ある日ぼくは、冗談で「アホやなあ」とか「それ全然ちゃうし」「ダメやなあ」などときつい言葉をその友だちに言いました。ぼくは、その言葉を言う前に、その友だちに勝負で負けていて少し腹が立っていました。今は、だからといってそんなことを言うべきではなかったと思っています。でも、その時は、言ってしまったので、その友だちとの関係が壊れてしまいました。最初はそのことに気づいていませんでしたが、日が経つごとに、その友だちと話をする機会が減ってきて、やつと気づきました。相手がどんなに傷ついていたのかを心の底からたくさん考え、翌日、何とか覚悟を決めて友だちにあまりました。

「本当にごめん。あんなことを言うつもりはなかったんだ。」
そう言った時、もし許してくれなくても、こういうことになったのは自分のせいだから、「許されなくても仕方がない」とは思っていました。それでも友だちが、

「そんなことでもうおこつてなんかいよいよ。」

と、許してくれたので、ほっとしました。

今、その時のことを反省するならば、勝負に負けても、そんなにおこらず、きつい言葉を相手に言わなければ、こんなことにはならなかったと思います。

このことがあってからぼくたちの関係は、前よりもよくなって、今ではとても仲がいいです。今その時のことを聞くと、

「あんなことを言われた時は、心の中が黒く塗りつぶされた感じだったし、あやまれた時も、一瞬、君との関係をもどすなんてむりだっておもったけれど、なぜか自然と許そうという気持ちが出てきて、許したんだ。」

と、言ってくれました。

ぼくはこの友だちとの関係を中学生になっても大切にしたいし、新たな友だちをたくさん作って、仲良くしていきたいです。これは高校生になっても、大学生になっても大切にしていきたいと思っています。

人と人との関係はとても繊細で、大切なもので、少しのことや、冗談で放った言葉が相手との関係を崩してしまうことがあります。普段から相手の思いを尊重することで、お互いの信頼関係をくずさないで、いい関係を作っていけると思っています。

本当の友だち

(小学六年生)

『本当の友だちって何だろう』と考えた時に、私は、『いつも一緒にいる友だち』のことなのかなと思いましたが、それって『本当の友だち』なのかなと思いました。

先日、合田先生との出会い学習がありました。その中で合田先生は、

「私は、小学生の時に友だちに気を使いながら生活をしていました。」

とおっしゃっていました。私も一緒だと思いました。

私は、あるグループに入っていました。グループの友だちとは一緒にいて楽しいけれどみんな気を使っている感じで、悪口や陰口を平気で言っていました。私は、心の中で、

「だめだ。」

と思っただけでも、自分も一緒に悪口や陰口を言っていました。誰かを仲間外れにしても友だちに合わせて同じようにして、見て見ぬふりを毎回していました。休み時間も、よくそのグループの友だちと過ごしていたので、他の友だちとは、ほとんど話をしていませんでした。

合田先生は自分の経験したことや差別やいじめについて真剣に私たちに伝えてくれました。その話の中で、私もいくつか共通点があり、私も自分と重ね合わせて話を聞いていました。

合田先生の話の中で一番心に残った言葉は『自分に指を向ける』です。私は、いじめている人や陰口を言い始めた人が悪いと思っ

ていましたが、それは自分に指を向けられてなかったのだと気づきました。『自分に指を向ける』ということは、あの時、自分はどうしたのか、グループの友だちと一緒にやって同じことをやっていなかったのかなど、自分と向き合って考えるということです。

言いたいことも言えず、無理をして合わせているのは、本当の友だちではないと思いました。

このような自分の姿から、『本当の友だちって何だろう』と真剣に考えました。

本当の友だちは、お互いが安心でき、心から思っている気持ちを伝えられる関係だと考えました。

これから私は、本当の友だちと思える関係を作っていくために、言いたいことをお互いに言え、だめなことはだめだと言える関係を目指していこうと思いました。

今まで、仲間外れをされるから、無視されるからといい、差別やいじめを残す立場にいた自分を、差別やいじめをなくす立場に立てるように、周りに流されず自分の思いを伝えていきたいです。

勇気はありますが、本当の友だちだったら分かり合えると思います。そうすることで、前よりも仲が深まると思います。

最近、私は同じグループの友だちに、

「少し言いすぎじゃない。」

と声をかけることができるようになってきました。友だちも、「たしかに言いすぎだったかな。」

と考えるようになりました。

まず、自分が変わり、自分が行動することで本当の友だちを作っ

ていききたいです。

これからは、自信をもって差別やいじめをなくす立場に立っていると言えるように行動に移していきたいです。そして、私のように行動に移せる仲間が増えてほしいです。

自分が変わることで、クラス全体も変わっていくと思います。そして、一人ひとりが、本当の仲間と思えるクラスを目指していきたいです。

作文【中学生の部】

私らしく生きる

(中学一年生)

私は女性の人権について考えてみようと思います。まず初めに自分の性別について考えてみました。私の性別は女性です。私が幼児のときには女の子らしい可愛い小物や可愛いキャラクターが大好きで、服などはヒラヒラとしたスカートやワンピースしか着なかつたそうです。ズボンを嫌がるので、外遊びするときに足を怪我しないか心配だったと母から聞きました。だけど今の私はスカートが苦手です。ズボンのほうが動きやすいし、格好いいと思っています。実は制服のスカートも苦手で、ずっと体操服を着たいと思うほどです。

では、私が昔大好きだった「女の子らしい」とは何でしょう。「女の子らしい」と聞いて想像するのは、小さいもの、華やかなものなどです。「女の子なんだから静かにしなさい」「女の子なんだから丁寧にしなさい」などと声をかけられたことが少なからず私にもあります。「女の子なんだから・・・」の後に続く言葉に、強さ怖さを連想するような言葉は付かないと思います。小さな子どもは何となく受け止めていたそんな言葉たちも、中学一年生になった私にとっては何とも言えない不思議な気持ちになります。女だからといって丁寧で静かでないきやいけない、なんて決まりはありません。男女関係なく、丁寧さは大事だと思います。

私が小学生の時は、担任の先生が生徒を呼ぶときは男女関係なく「くさん」と呼んでいました。席順でも授業でも男女混合でし

た。小学生の時はあまり男女の差を感じて生活することは少なかったように思います。しかし、中学生になった今では、男女で体格差、体力差があります。学校生活を送る上で男女差があることに大きな違和感を感じることはありませんが、先生が力仕事を頼んでくるときは「力持ちの子、来て〜」といいます。そういった場面の時に率先していくのは男子です。女子が行くことはほとんどありません。やはり普段このように何気なく受け止めていたこともよくよく考えれば無意識に「男性だから・・・」「女性だから・・・」という言葉を使って、自分を含め、まわりの人の事をくくってしまふことがあるように思います。

また仕事や家事の事について考えてみると、家事をする人イコール女性と考えてしまうところがあります。実際に私の両親は共働きで、父と母は同じくらい働いています。家事は主に母が行っています。父も家事は行いますが主ではありません。私自身、母が毎日料理をしてくれて、お弁当を作ってくれていることに感謝はしていますが、違和感を感じたことがあります。

ですが、こちらもよく考えると家事は女性の仕事なんという法律はありません。誰が決めたわけでもないのにずっと前からそのようになっていく。祖父母の家ではもともと明らかに家事は女性の仕事です。祖父母の家で食事をするときには祖父はほとんど動かず、祖母が準備をしています。さらにもっと昔の世代の女性は学校に行くことも自由ではなく、家事と育児が全てで、家族のために家の中で働き、女性は男性よりも立場が下である扱いを受けていた時代もありました。

今の日本は義務教育で、女子も男子も平等に学校に行くことができ、それは当たり前のことだと皆が思っています。しかし現

代では当たり前の男女平等の権利が当たり前ではなかった時代があったのです。その時代も女性は女性らしく生きていたけれど、自由ではなく、男性より立場も弱く、男女の不平等が違和感なく受け止められていたのです。皆が今よりもっと「男だから」「女だから」という言葉でくくって生活していた時代の中でも、教科書に載るような男女平等の運動がおこる以前に、きっとその中の誰かは違和感に気付き、行動しようとした人もいたと思います。しかし、その時代の皆が思っているような「男らしさ」「女らしさ」から外れた考えをもった人は、その違和感が異常なもののように扱われたことでしょう。「男らしさ」や「女らしさ」で皆をくくり、違う考えを認めないことは人権の侵害であると思います。

そんな時代を経て私は現代を生きています。私は男女関係なく私らしく自由に生きたいです。もっと女性と男性がお互いを尊重できる社会にしていきたい。確かに学校でも男子と女子というように区別はありますが、これからは、私らしさが侵害されることのない社会を私たちの世代で作っていくことが大切だと思います。

理解のしかた

(中学三年生)

私は先日、友達とショッピングモールに行ったとき、私が試着室から出るとすぐそこに、車椅子に乗った女性がいました。その人は手に服を数枚持っていて、試着したそうにしています。店員さんに断られていました。その時はちょうどお店が混んでいて、「障害者は試着に時間がかかるから」という理由でした。そこにその人の友人のような人がきて、女性は少し恥ずかしそうに二人で店を出ていきました。私はその光景を見て、変だなと思いました。確かにたくさん人がいる中で一人が時間をかければ、他の試着したい人が困ることはあると思います。ですが、見た目だけで障害者だ、と決めつけ、障害者Ⅱ着がえが遅いという考えは間違っていると思います。障害者の中には確かに着がえが苦手という人はいますが、障害がなくても着がえが遅くなることはあります。それとは別に私の隣を使っていた人は一人で何着も試着したりしていました。

その後私は友達とフードコートに行きました。お昼時でとても混んでいて、席がほとんど空いていませんでした。ですが、友達が知らない人に相席を頼んでくれたようで、私もご飯を買ってその席に向かうと、偶然にも相席してくれたのは、さっきの女性でした。私と友達は食事中あまり会話をしなかったのですが、隣の人達の会話がよく聞こえてきました。その会話はよくある大学生のようなものでした。障害者だとか健常者だとか関係なく楽しそうに話していました。私はそれをきいていて、この人の友達は、障害の理解をしているのではなく、その女性自身を理解しているのだと思

いました。

たいていの人は外見を見て、この人は優しそう、この人はカッコイイ、この人はそういうのが好きなのかな、この人はどういう人なんだろう、など様々なことを考えます。ですが、先ほどの女性のように、車椅子に乗っていたりすると、この人は障害者だ、もしくは、かもしれないと思うことが多いと思います。障害についてあまり知らなかったり、理解が浅いとそれだけで距離を置いてしまったりします。ですが、今まで喋ったことのない人がたまたま自分の好きなキャラのキーホルダーを付けていると、それがきっかけで、仲良くなつて、後からその子には障害があると知った場合、初めは理解がなかったとしても、障害者も自分とそんなに違うわないと分かると思います。つまり、障害はその人の一部であり、その人自身ではないということです。

人は、その人の全てを理解できるということもあれば、まったくできないこともあると思います。家族や友達で、どれだけ仲が良くても、全てを理解することは難しいということもあります。でも、それが悪いことだとは思いません。なぜなら、理解ができないからといって、その子と仲良くなれないというわけではないからです。友達と考え方が真逆、好きなものが全然違うというのは普通です。

友達の中の、二つや三つ、四つ理解できなくても無理して理解しようとしなくていいと思います。それは障害者も同じです。友達に障害があったとして、障害について理解できていなくても、残りの七つ、八つ理解できればそれでいいと思います。障害は特別なことではありません。理解できていないことが偶然障害だったというだけです。それに、理解できていなくても支えることは

できます。例えば、自分の興味ない話も、自分の好きな人が話していれば一生懸命聴いて、知識が増えていきます。それと同じで一緒にいれば、何をするのが苦手で、どうしたらそれがしやすくなるのか分かってくると思えます。でも、そうやって助けるのは障害者だからではなく、友達だからです。

障害者は、国内総人口の約六パーセントいます。これは十六人に一人、クラスに二人いるということになります。そう考えると、やっぱり障害があるということはまったく特別でないということがわかります。

今は様々な場所が、バリアフリー、ユニバーサルデザイン仕様になっていきます。エレベーターでは、ドアの開いている時間が「車椅子ボタン」を押すと、四秒から十秒になったり、車椅子用の買い物カートがあったり、たくさんのことが障害のある人にとって便利になってきています。ですが、こんなに便利になっても、あの時の女性のように自分だけ使えないということもまだまだあると思います。

人に優しく接するというのは、障害について理解していなくても、相手が障害者かどうか関係ないことだと思います。大事なのは、理解しているか、していないかではなく、人とどう関わるかです。だから私はみんなに平等に優しい社会をつくりたいです。

標語

【小学生の部】

- ・ワンタップ スマホの文字は 消えないよ 五年生
- ・この世界 生まれちゃいけない 命はない 五年生
- ・勇気出せ だいじななかま 守るため 五年生
- ・みとめよう 十人十色 みんないい 五年生
- ・支え合い 笑顔の花を 咲かそうよ 五年生
- ・だれだって 光り輝く 主人公 六年生
- ・思いやり 進んで動く 人になる 六年生
- ・その言葉 その行動が 思いやり 六年生

【中学生の部】

- ・ SNS 「便利」の裏には SOS 一年生
- ・ 「やめよう」と 言えたら誰かが 救われる 一年生
- ・ 送信前 誹謗中傷 見極めよう 二年生
- ・ あいさつは 友達つくる 愛言葉 三年生
- ・ ふざけてた とり返せない その行動 三年生

メッセージ「あなた大切な人へ」

最優秀賞

「家族」へ

私が辛い、学校に行きたくないって言ったとき、ひとりじゃないし私らがいるから大丈夫やでって元気づけてくれてありがとう。泣いたときは背中をさすって傍にいてくれてありがとう。家族みんなが私のことを気にかけてくれたおかげで今は毎日楽しく学校に通ってるよ。いつもありがとうございます。
(高校1年生)

優秀賞

「おばあちゃん」へ

人一倍心配症なおばあちゃん。そんなあなたの口ぐせはいつも「大丈夫?」。誰よりも一番私のことを想ってくれて、すること全てに全力で応援してくれるそんなおばあちゃんが私は大好きです。私はもう高校三年生。必ず夢を実現します。なので、これからも私の側で元気いっぱい笑っててください。
(高校3年生)

「友人」へ

いつも支えてくれる友達がいる。私を見てくれる友達がいる。わがまま聞いてくれる友達がいる。怒ってくれる友達がいる。親身になって悩んでくれる友達がいる。愛してくれる友達がいる。私もそんな友達になれているといいな。いつもありがとう。
(高校1年生)

「母」へ

私にはとてもすごい母がいます。私の母は毎日毎日朝、昼、晩とご飯を作ってくれます。私は野球をしており、洗うのがしんどい泥だらけのユニフォームを毎日揉み洗いをしてくれます。私はそんな母に直接感謝の言葉を伝えることは恥ずかしいのでここで言います。いつもありがとう。
(高校1年生)

「旅立つ息子」へ

二人の兄達とは七〜八才離れている三男の息子が漸く住み慣れた我が家を離れる事になりました。ここにくる迄、^{ひにろ}日々や時間が掛かりましたね。時には、私達と険悪になった時もありましたが、今ではそれも苦い経験となりましたね。これから先、色々な困難もあるかと思いますが、どうか乗り越えて頑張ってください。応援しています。
(一般)

図画・ポスター

《小学生の部》



1年生



1年生



2年生



2年生



2年生



3年生



3年生



3年生



3年生



4年生



5年生



5年生



6年生



6年生



6年生

図画・ポスター

《中学生の部》



3年生



3年生



2年生



3年生



3年生

人権尊重都市宣言

すべての人々の人権が尊重される自由で平等な社会の実現は全世界共通の願いである。

しかしながら、現実の社会生活においては人権が侵害される事象が依然として存在しており、これを解消することは私たち全市民に課せられた責務である。

よって、当市議会は、あらゆる差別を撤廃し、すべての人々の人権が保障される明るく住みよい地域社会を実現するため、ここに人権尊重都市宣言を決議する。

平成3年3月27日

名張市



名張市子ども条例に基づく「ぱりっ子会議」
考案キャラクター なばりん

—人権作品集—
2023年2月発行
名 張 市
名張市教育委員会
名張市人権啓発まちづくり事業推進会議

この冊子は再生紙を使用しています。